19世紀英国の労働者階級文化と教育態様についてのノート

上　野　耕三郎

I　労働者階級文化　社会統制

1960年代以降，それ以前には提起されることのなかった課題意識に導かれて，教育の社会史的書きかえがすすんできた。

教育の社会史は，社会学をはじめとする社会諸科学によって生みだされた社会理論からの知的刺激を自らの内部に繰り込み，展開されてきた。それらの社会理論からの理論的刺激は，かつて問題視されることのなかった歴史研究上の枠組みの有効性に対する懐疑を生み，その疑問に答えるために，研究対象そして史料の範囲を拡大することへと歴史家を駆り立てていった。「もの言わぬ人びと」の研究もその一つの顕著なあらわれであろう。「もの言わぬ人びと」の視座から歴史を逆照射することによって，新たな歴史像を構築する道を模索しているといってもよい。

歴史を逆照射することは，〈現在（いま）〉をもその圏内に巻き込んでしまいたいとの志向性を孕んでいる。教育の社会史が出現する契機となったものは，1960年代以降の世界史的な教育構造の変化に対する鋭い危機意識であった。多くの教育の社会史家の課題意識の背後には，現代教育の社会的・政治的批判を展開するために，歴史研究から抽出した洞察を活かそうとする志向性がみられる。一言でいうならば，〈近代〉教育の批判的再考ということである。

以上のような研究動向は19世紀の教育史にも妥当する。

かつての民衆教育史家の課題意識は〈現在〉の擁護という点にあった。その研究は教育について現代の議論が疑問を投げかけている前提――近代公教育制

度はプログレッシヴである――にもとづいていた。したがって，リベラルな歴史学伝統に依拠する歴史家は，初等学校政策・制度の史的展開の中に，子どもの教育機会の漸進的拡大の基礎を読み取ろうとした。リベラルな教育史では，近代公教育は労働者階級のためにフォーマルな学校教育が，国家と教会の連合あるいは競合を通じて提供されるものと捉えられていた。いうならば，それは20世紀の福祉国家デモクラシーの発展を跡づける試みであった。この視角のもとでは，福祉国家デモクラシーというイデオロギーに搦めとられて，「教育」概念は著しく限定され，当然のことながら研究は政策・制度史へと過度に集中していった。

この研究視角のもとでは教育主体としての労働者が語られることはまずない。教育の社会的要請が，親たる労働者の教育要求という形で表出される可能性を探り出す道はそのはじめから閉ざされていた。労働者は「教育の進歩」の前に立ち塞がる妨害者であり，せいぜいのところ慈恵的ミドル・クラスが提供する「教育」の無関心で受動的な消費者として性格づけられている。

このような労働者像はなにも後世の歴史家による捏造ではない。ヴィクトリア朝の公的史料の無批判的受容，公的言説への絶対的信頼にもたれかかる限り，そのような像を結ぶのはきわめて自然の成行きである。そもそも，当時の教育改革家・行政官らは〈教育＝学校〉という教育戦略に規定されており，子どもが学校に通っていないと，子どもは教育されていない，との確信に凝り固まっていた。この先入観に支配された彼らは，学校以外に子どもたちが利用できた教育＝学習形態が存在したことに気づきもしなかった。たとえ気づいたとしても，それは彼らにとって「教育」ではなく，否定すべき対象でしかなかった。

なにゆえ〈教育＝学校〉がこのように時代の前面に躍り出てきたのだろうか。

1830，40年代という教育危機の時代に公刊されたブルー・ブック，統計協会の教育調査報告書，教育評論がその俎上に載せたのは，学校教育問題にとどまらなかった。[1]異常ともいえるほどの熱意をもって，ミドル・クラスが批難の

(1) Richard Johnson, 'Elementary Education : The Education of the Poorer Classes' in Gillian Sutherland *et al.* (ed.), *Education in Britain* (1977) は公的史料の解読・解釈への好ガイドである。

対象としたのは，彼らの眼には了解不能であった労働者の生活・行動様式――労働者に固有な機関，民間伝承，慣習，心性など――である。その告発事項を数え上げればきりがない。まさに告発のオンパレードである。なにもこれはミドル・クラスの精神異常ではない。一言でいえば，労働者階級固有の〈文化〉が批難の槍玉に上げられたのである。もちろん観察者・報告者はそれを〈文化〉と認識し得たわけではない。ミドル・クラスの多くの人びとにとって，労働者は話したこともない異人種であった。自ら労働者街に足を踏み入れる機会も，そして気概も持ちあわせていなかった彼らにとって，労働者の収入，教育，住居，衣服，ことばづかい，家庭情況は自らの了解能力をはるかに超えるものであった。だから，それを眼の前に突き付けられた際に，彼らは戸惑い，その異様さに恐れおののいたのだ。

教育へのミドル・クラスの期待は，新しい市民社会的秩序への馴化に容易に応じない労働者階級文化の「粗雑さ」「頑固さ」への対応にあらわれている。「粗雑さ」「頑固さ」を除去する要求と同様に，その文化を媒介として生まれてくる，市民社会の支配的イデオロギーの浸透を拒むものへの恐れは，親の「不道徳（イモラリティ）」への告発・批難と，文化的再生産機能を学校によって置換する試みの背後に存在した。市民社会の統括者であるブルジョアジーにとって，市民社会的秩序の維持・再生産のためには，この〈文化〉そしてその再生産の回路を断ち切っておくことが緊要な時代的課題であった。なぜならば，この〈文化〉は一定の自律性を保有し，市民社会の支配的イデオロギーへの同化を鋭く拒否する志向性を含む社会規範，生活習慣，行動様式，心情，心性に支えられており，資本主義社会の秩序に攪乱的影響を及ぼす可能性を孕んでいたからである。

ブルジョアジーが躍起となって確立しようとした学校教育は，いわば再教育の任を負わされたものであり，子どもたちや親の世代を育んだ〈生活圏〉から子どもたちをひきずり出し，〈生活圏〉に対する初源的忠誠を除去・抹殺する大規模な試みから構成されていた。ブルジョアジーの視座からは，「堕落」し，矯正不可能な親の世代の「罪」は，文化的再生産である階級的そして「道徳的罪」であった。学校と教師の役割は親の世代の「道徳的罪」から子どもたちを

救済し，文化的再生産の回路を遮断し，ヘゲモニー手段をブルジョアジーの掌中に握り，市民社会的イデオロギーの浸透した労働者の新世代を大量に生み出すことであった。

ブルジョア・イデオローグにとって，社会問題の元凶は社会・経済制度の矛盾にではなく，労働者の個人的性格に見出されるべきものであり，労働者の道徳的頽廃へと問題は転嫁されている。ヴィクトリア朝の一大社会問題であった貧困も犯罪も「道徳」問題，したがって教育問題として語られるのが常であった。もちろん第一義的解決方法は救貧法と刑法典の改革とその実施であった。しかし，予防は治療よりは安上がりで，ヒューマンであるので，民衆学校教育が貧困，犯罪そして諸々の社会問題の万能薬として浮上してくる。(2)

したがって，近代公教育学校は「社会統制（ソーシャル・コントロール）」機制の重要な一領域を構成するものである，との説は一定の妥当性を持つであろう。(3)

しかし，「社会統制」概念自体は構造一機能主義モデルであり，そのモデルは搾取を基盤とした敵対する階級制度についてではなく，個人と社会組織体との間の相互作用モデルにとどまっており，マルキストあるいはセミ・マルキストの資本主義発展理論とそれとを結びつけようとする試みは，不幸な結果を招くであろう，との批判に晒されている。(4)

また，「社会統制」概念の歴史への適用は，しばしば立法・行政意志とその意志の受容とを混同する危険性を孕んでいる。すなわち，階級支配を企図し，それを具現化できる立場にある一握りの立法家や行政官の意志，その意志が反映した法律・制度の意味を過度に強調しがちである。このことの裏がえしとして，上から提供されたものに対する労働者階級の子どもや若者たちの草の根の

---

(2) Richard Johnson, 'Educating the Educators : "Experts" and the State 1833-9', in A. P. Donajgrodzki (ed.), *Social Control in Nineteenth Century Britain* (1977)

(3) 「社会統制」としての教育という観点から当時の教育を扱った典型的論文として，Richard Johnson, 'Educational Policy and Social Control in Early Victorian England', *Past and Present*, no. 49 (1970), Robert Colls, 'Oh Happy English Children ! : Coal, Class and Education in the North-East', *Past and Present*, no. 73 (1976)

(4) Gareth Stedman Jones, 'Class Expression versus Social Control ?', *History Workshop*, 4 (1977), p. 167.

反応が無視され，労働者階級がブルジョア意志の浸透した法律・制度の攻勢に拮抗し，あるいは支配的文化から独立して，彼ら独自・固有の文化，それに基く教育慣行を産み出すことがほぼ不可能であるというように，きわめて一面的に「ヘゲモニー」の解釈がなされている。

子どもそして親はブルジョアジーの意志通りに練り上げることの可能なパテではなかった。「社会統制」としての近代公教育学校の「受け手」たる労働者階級は，そこに盛られた意志，奨励された価値を自動的に吸収したわけではない。彼らは提供された商品＝学校教育を自らが依拠する〈生活圏〉内に繰り込み，許容できる部分は受容し，許容できない部分に対しては敵対・排除あるいはその意図を自分の利益のために歪めるなどして，自らの教育意志を実現していたのである。(5)立法・行政による教育意志およびその具体化と，労働者階級によるその意志の受容との間の相剋・争いの背後に，家族や労働者階級地域共同体が育んだ価値，行動様式そして固有の教育慣行の存在を読み取ることも可能である。

このような視角からすれば，教育＝学習に対する労働者階級の受動性・アパシー説と，公的に提供された学校教育のみが価値ある唯一の教育形態であるとの前提を疑問視することが，平板に流れやすい教育史を超克するのに有効性をもつ一つの接近方法であることが理解できよう。〈教育＝学校〉と〈非教育＝学校以外の生活総体〉が画然と疎隔・分離されておらず，融和していた時代の教育相にもう一度目を凝らすことによって，社会の基層に流れている労働者階級による教育慣行と学校教育との関係を見定め，学校教育に対する無関心・嫌悪・敵対を，教育＝学習に対するそれを表現したものとみなす考えを疑うことから，新しい歴史像を獲得する地平が切り拓かれるはずである。(6)

(5) Phillip McCann (ed.), *Popular Education and Socialization in the Nineteenth Century* (1977) 所収の諸論文は「社会化」概念の教育史への適用であるが，教育提供者の意図と受け手たる労働者の受容との間に乖離があったことを指摘している。

この側面からの「社会統制」概念の不備については，F. M. L. Thompson, 'Social Control in Victorian Britain', *The Economic History Review*, vol. 34, no. 2 (1981) 参照。

(6) 70年代以降，このような視点はニュー・レフトの史家を中心に共有されていった。

結論を先取りしていえば，労働者階級は独自・固有の教育価値意識・目標・慣行を保持しており，制度化された学校教育への拮抗・対抗は，このような労働者階級内の文化傾向によって育まれたものである。また，この階級文化は公的教育機関に拮抗・対抗する自らの統制下にある教育領域を創り出し，公的教育機関から独立した教育活動の網状組織を産み出していた。

したがって，近代公教育学校は知的にも道徳的にも貧しい階層に初等教育を供与するということではなく，利用可能な教育＝学習形態を保持する階層への，特殊な教育形態の強制である，ともいえよう。近代公教育制度の発展の速度と形態は，その受け手たる労働者階級の背後に存在した教育価値意識・目標・慣行との間の，公然・非公然の根深い相剋・争いによって直接・間接に影響を受けたものである。近代公教育学校制度が「教育」の代名詞となる支配的体制——労働者階級固有の自主的教育形態が国家によって監督・統制された近代公教育学校形態にとって代わられる過程——は，労働者階級文化基盤の上に依拠する教育網状組織の歴史的・論理的衰退と，国家による執拗な攻撃による網状組織の分断・破壊が達成されるまで，完全には達せられなかった。

以下，労働者階級文化内の教育態様とそれが依拠する基盤，労働者の知的上昇と文化との関係，そして近代公教育による労働者階級文化の変容を，きわめて粗いスケッチではあるが，提出してみたい。

Ⅱ　家族　仕事場　地域社会

教育は家族の経済的利益と子どもの教育利益との間のせめぎ合いの渦の中に存在した。労働者家族のうちで，常時一次貧困（プライマリ・ポヴァティ）を免れているのは，7家族のうち1家族でしかなく，(7)子どもの労働収入は家族の生活水準維持に決定的影響力を及ぼした。

この経済的圧迫の中で，子どもを学校へ通わせるためには，親は授業料の支払い，そして子どもの労働収入を失うという二重の経済的痛手に耐えなければ

(7) J. O. Foster, 'Nineteenth-Century Towns—A Class Dimension', in H. J. Dyos (ed.), *The Study of Urban History* (1968)

ならなかった。それゆえ，読み書きという基礎的技能のできるだけ早い習得は，親が支払う授業料を節約できたばかりか，家族収入への子どもの寄与をもたらした。

ただし，学校教育機会の享受可能性は家族規模によって，あるいは少年と少女とでは差異がみられる。少女は年長になれば家事の切り盛りを手助けし，母親の代替ともなったので，少年よりも学校教育の期間は短くなる傾向がみられた。また，家族内での，あるいは家族のライフ・サイクル上での子どもの位置によっても，教育機会の享受可能性はちがってきている。家族のライフ・サイクルからいっても，長子よりも長子らの労働収入によって家族の経済的安定がはかられる時期に教育期を迎える末子の方が，教育機会の享受可能性は当然のことながら高い。(8)

さらに，重要視されるべきは，労働者階級の間にメリトクラシー的な考えがほとんどひろまりをみせていなかったことである。学校よりも総体としての生活にこそ教育は宿っている，との根強い考えがそこにはみられる。労働者階級の間では，教育はもちろん本からの知識習得を内に含んでいるが，それは周縁的地位を占めるものでしかなかった。教育とは一人前の大人になる過程の諸々のものを含み込んだものであり，核となる関心は子どもに稼ぐことを学ばせ，経済的自立を教えることであった。少年たちが働く父親を見習いながら，仕事を覚え，一人前の働き手となる過程が労働者の間では強調されている。親は子どもたちがそうすることによって「学校で得られる教授よりも，将来の世俗的運命に関連する，より価値のある一種の実業教育」(9)を受けていると信じていたからである。

実際に，学校よりも生活過程内に教育が宿っている時代の中では，学校が識字と知識をひろめるのに演じた役割はけっして独占的なものではなかった。したがって，近代公教育学校確立以前の識字率の源泉を探るに際して，学校教育

(8) John S. Hurt, *Elementary Schooling and the Working Classes 1860—1918* (1979), ch. II. 参照。

(9) *Census of Great Britain : Reports and Tables on Education in England and Wales (Education Census, 1851)*, P. P. 1852–3, XC, p. xl.

が識字を産み出した，との前提に立つ限り，解答を探りあてることは土台無理である。義務教育制度確立以前は，制度的アプローチをとっている歴史家が考えている以上に，親，縁者そして友人が子どもに対して決定的ともいえる最初の教育的影響力を行使していたからである。(10)

労働者の自叙伝の内容はそのことを如実に示している。1788年生まれのバンフォードは親から「毎日一種の炉辺教育」を施された。将来の急進主義者に政治に対する性向を植えつけたのは，彼の父親――織布工，ペインの信奉者，かつての私営学校の教師――であった。バンフォードは学校よりも家庭で多くを学んだ典型的な例である。(11)1800年生まれのチャーティストであるラヴェットの教育経験は，厳格な規律励行者であるメソディストの母親，そして彼に読み方を教えた80歳になる會祖母によって始められた。彼はアルファベットを習得する以前に，街のすべてのおばさん学校に通わせられた経験をもった。(12)

これらのいわば労働者インテリゲンチャアの教育経験は19世紀半ばまで存続し，もの言わぬ多くの人びとによっても共有されていた。たとえば，児童雇用委員会の初期の報告書は，個々の家族が子どもたちに基礎的識字を獲得させるのに，いかに格闘したかを垣間みせてくれる。

「(たいへんよく) 読むことができる。自分の名前が書ける。彼の父親が彼に教えた。炭坑へ下りる前に2年余り学校へ通った。」(13) (John Kinsler)

「12歳である……私が炭坑へ入ったのは9歳のときであった。……私は少しだけ読み書きができます。……両親によって，そして学校で習った。」(14) (William Arnold)「炭坑で働く以前に全日制学校に通った。……私は（た

(10) 識学率の最近の研究については，さしあたって W. B. Stephens, *Studies in the History of Literacy: England and North America* (1983) 参照。

(11) Samuel Bamford, *Early Days*, 2nd ed. (1859), pp. 2. 41, 43–4, quoted in Richard Johnson, "Really Useful Knowledge": Radical Education and Working -Class Culture, 1790—1848', in J. Clarke *et al.* (ed.), *Working Class Culture* (1979), p. 80.

(12) William Lovett, *The Life and Struggles of William Lovett*, Fitzroy ed., ed. R. H. Tawney (1967), pp. 1–6.

(13) P. P. 1842 [381] xvi, *C. E. C.*, p.605, quoted in Phil Gardner, *The Lost Elementary Schools of Victorian England.* (1984), p. 99.

(14) P. P. 1842 [381] xvi. *C. E. C.*, p. 677, quoted in Phil Gardner, *op. cit.*, p. 99.

いへんよく）読めますし，少し書くことができます。私は現在家庭で習字帳で学習しています。」[15]（William Flewit）「現在学校に通っていません……働きに出る以前にかなり長く全日制学校に通いました。しかし読み方はほとんど家庭で習いました。」[16]（Eleanor Scrowther）

これらの事例は，子どもの興味や関心を喚起するのに，そして性格を形成するのに親の影響力がすこぶる重要であった，という一般化以上のことを示唆している。父親が子どもに読み方を教えることができた歴史的前提条件として，識字が世代継承されていなければならないし，その世代的再生産のための時空間が確保されていなければならない。この歴史的前提条件が生き残っていたことの意味するところはきわめて大きい。

このことを理解するためには，少し眼を転じて，当時の労働者の家族構造に触れておいた方がよいであろう。[17]

農業や農村家内工業では父親は家長として家族を統率し，仕事全体を監督した。子どもたちは父親の傍で幼い年齢から父親を手助けしながら，「労働」と「遊び」の境界を意識することなく職業技能を習得し，文化を継承し，一人前の大人となるための訓練を受けてきた。このような時代相では家庭はしつけや道徳訓練の場としても充分に機能していた。[18]

---

(15) P. P. 1842 [382] xvii, *C. E. C.*, p. 140, quoted in Phil Gardner, *op. cit.*, p. 99.

(16) P. P. 1843 [432] xv, *C. E. C.*, p. 119, quoted in Phil Gardner, *op. cit.*, p. 99.

(17) 当時の家族構造については以下の著作参照。N. J. Smelser, *Social Change in the Industrial Revolution :An Application of Theory to the British Cotton Industry* (1959). Michael Anderson, *Family Structure in Nineteenth Century Lancashire* (1971). David Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom : A Study of Nineteenth Century Working Class Autobiography* (1981).

(18) いささか郷愁にかられてはいるが，手織布工家族の次のような描写はこのことを示している。

「糸巻きに糸をまく小さい子どもたち。少し年かさの子どもたちはきずがないか見張ったり，織った布地をよりわけたり，杼を広幅の織機に入れるのを手伝ったりしている。第二，第三の織機を動かしているのは若者たちだ。妻は家事のあい間に織機のまえにすわる。家族はいっしょだった。そして，たとえどんなに貧しい食事であれ，少なくとも好きな時間に顔を合わせて食卓を囲むことができた。」

「私の仕事は織機のそばであり，父親は糸を巻いていない時には私に読み書き算術を教えてくれた。」（E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class.* Penguin Books (1968), pp. 321, 339.）

もちろん，産業資本主義の確立の過程の中で，生産単位としての家族は消え失せる運命にあった。しかし，その崩壊の過程はドラスティックに進行したわけではない。産業革命の基幹産業である綿工業では，家族単位の雇用が浸透しており，父親が紡績工の場合，自分の子どもを清掃工そして糸つむぎ工として雇用する慣習がみられた。(19) この雇用関係のもとでは，かろうじて父子間の職業技能伝達機能が温存されており，父親は子どもを自らの監督下で訓練することができたし，子どもにとっても親は温情的な職業技能伝達者として立ち現れていた。

最も資本蓄積の進行した綿工業においても，家族単位の雇用が生き残っており，必ずしも労働に対する資本の意志は工場の隅々にまで浸透していたわけではなかった。ましてや資本蓄積の遅れた産業部門はいうまでもない。労働者にとって伝統的・防御的緩和策であれ，依然として資本の意志から自律した時空間を持ち得る可能性は限定つきながら残されていたといえよう。その可能性の基盤はきわめて脆弱であり，歴史的・論理的に開かれていく存在ではなかったにしても，このような時空間のひろがりこそ，文化の世代的再生産を可能にさせた基盤であった。

ちなみに，工場での父子の雇用関係のもとでの家族構造は，それ以前の農業や農村家内工業の家族と比較すると，若干の重要な点で差異を示していた。

工場労働は家庭から父親を引きずり出した。その結果，かつて家庭内で父親が子どもに対して行使することのできた教育力は希薄化し，とりわけ，入職年齢以前の幼い子どもたちの社会化のかなりの部分は母親の手に委ねられた。したがって，職場での社会化と入職以前の社会化は父親と母親との間で家内工業よりも一層鮮明に分化した。また，母親が経済的貧窮ゆえに家庭外労働に従事した際には，母親の代替である子守り・子育ての機関の発展を促す契機となった。(20)

(19) ただし，すべての紡績工が糸つむぎ工として適切な年齢の子どもを持っていたわけではない。(Michael Anderson, 'Sociological History and the Working-Class Family : Smelser revisited', *Social History*, 3. (1976))

(20) *Ibid.*, p. 322.

また，家内工業家族では父親は労働・余暇時間を決定し，子どもの適性・能力・体力に応じて仕事の強度・速さを加減し，父親が適切と考えれば漸次高度な職務役割へと子どもを昇進させることができた。父子の雇用関係が浸透した工場では，父親は子どもの労働に統制を及ぼすことはどうにかできたものの，労働時間は資本によって規定されており，仕事の速さや雇用する補助労働者数は生産過程によって大きく規定され，父親や子どもの行動，昇進に関する規則は雇用主によって規定され，父親の役割は従属的なものとならざるを得なかった。(21)

だが，家族の経済的紐帯を希薄化させるこの経済システムにもかかわらず，労働者家族は崩壊したわけではない。逆説めくが，貧しさがかえって家族の紐帯を強化し，一種の親和性さえもかもし出した，といったらいいすぎだろうか。

農村共同体の崩壊に伴い，頼る者とてなく工業都市に流入してきた幾多の労働者にとって，日々の生活不安は大きかったにちがいない。国家による福祉制度が整備されている現代とは違い，子どもの誕生，貧しさゆえに妻が働きに出た際の子守り・子育て，失業，病気，死などは家族を即座に経済的危機に陥(おとしい)れ，解体に追い込む衝撃力を持っていた。誕生から死に至るまでのライフ・サイクル上での生活危機の衝撃を最小限度に食い止め，経済的・心理的不安を解消するために，労働者階級は日常的レヴェルで血縁や地縁という人と人との結びつきを積極的に求めていた。たとえば，子育てにおいて，労働者階級家族に同居している祖母や血縁が大きな役割を果たしていたことからも推察されるように，都市の労働者階級は三世代家族などの拡大家族を形成し，この危機に対処しようとしていた。(22)

家族を中心とした人と人との結びつきの強さは，近隣集団にまでひろがりをみせていた。労働者街は住民個人個人が相互に切り離された，アトム化された寄せ集めの集団ではなく，住む人びとの紐帯の濃密な，一種独特の親和性と自律性を持った社会を形づくっていた。労働者街は「通り」を単位として形成さ

(21) *Ibid.*, pp. 322–323.
(22) Michael Anderson, *Family Structure...*, ch. 10.

れており，同じ「通り」には同姓や同郷の人びとが肩を寄せ集めて住み，困難にぶち当たった際には，援助の手を差し伸べてくれる「同じ仲間」として，経済的・心理的不安への緩衝壁となっていた。

親和性そして人と人との絆が強い労働者街で，子どもは同輩集団のなかで揉まれ，青年として大人へのステップを踏み，一人前の労働者階級の一員となっていった。周囲に注意深く監視・管理の網の目を張り巡らされたミドル・クラスの子どもとはちがい，労働者階級の子どもは一種の「自由」――それは貧しさを常に伴っているものであり，「解放」を意味するわけではない――を享受できた。

労働者階級の子どもたちにとって，うす汚れた街，そこに育まれる人と人との結びつきこそ彼らの「学校」であり，子どもたちは同輩集団を媒介として，労働者階級独自の生活・行動規範，心性を獲得し，親と同じ階級，労働者階級共同体への帰属意識を自らのものとしていったのである。(23)

Ⅲ　労働者階級私営学校　日曜学校

労働者階級の教育経験は一様ではない。教育は生涯の凝集された時期＝〈子ども時代〉を包摂するものではなかった。教育が家族経済に従属している結果，子どもにとってせいぜいのところ学校教育は断片的な教育経験にとどまっていた。(24)

「……かなり上手に書くこと，そして算術とカテキズムは少し習った。そしてこれが学校で習うべきとされていた範囲である」(25)とラヴェットが述懐しているように，恵まれた子どもさえ識字と算術の初歩が学校で彼らの学んだすべてであった。

---

(23) 時代は下るが19世紀末から20世紀初頭にかけての少年・青年の同輩集団については，Stephen Humphries, *Hooligans or Rebels ? : An Oral History of Working-Class Childhood and Youth 1889–1939* (1981) 参照。

(24) ある国教会系の学校では，在簿（登録）年数は34.5ヶ月であり，61％は3年を越えなかった。(Beryl Madoc-Jones, 'Patterns of Attendance and their Social Significance, Mitcham National School 1830–39' in Phillip McCann (ed.) *op. cit.*, p. 45.)

(25) William Lovett, *op. cit.*, p.4.

しかし，労働者階級は貧しさの中に彷徨(ただよ)う学校教育の単なる受け手ではなかった。労働者階級地域共同体は学校教育に対して積極的な教育要求・意志を持ち，イニシアティヴを発揮しており，教育の展開過程は国家，教会，慈恵団体という外部の諸組織によって労働者階級地域共同体に外から押しつけられた商品の一面的受容ではなかった。そのイニシアティヴは労働者階級私営学校（working class private schools）の簇生そして公営学校への対抗・敵対関係の中に読み取ることができる。(26)

労働者階級私営学校は文化的にも空間的にも地域共同体内から湧き上がった教育形態であり，その教育要求に応える存在であった。私営学校の財政基盤は親の支払う授業料に全面的に依拠しており，地域共同体の教育要求に応えない限り，経営・運営は不可能であった。したがって，地域共同体は学校の教育内容・方法・組織に対して一定程度の支配・統制力を保持・行使することが可能であった。それは二大協会系の公営学校では認められるはずのないものであった。

私営学校の教師は地域共同体の一員であり，子どもを学校へ通わせる親たちの友人そして隣人であり，学校の使用者と同一の〈生活圏〉を共有する人物であった。教師になるには特別な資格を必要とはせず，日常的読み書き能力とそれを伝達する技能が基本的要件であった。(27)また，地域共同体にとって価値をもつ知識の持ち主として，教師は地域社会に対して子どもの教育をこえて重要

(26) 労働者階級私営学校は，一連の公的報告書で批判の槍玉にあげられ，「おばさん学校（dame schools）」「粗末な全日制学校（common day schools）」という蔑称で呼ばれている学校である。「おばさん学校」「粗末な全日制学校」というカテゴリー自体は，ミドル・クラスの調査者による所産であって，当時の労働者階級私営学校が自らそのように名乗っていたわけではない。ミドル・クラスにとって「おばさん学校」「粗末な全日制学校」は〈非教育〉のメタファーであった。

ニューカッスル委員会報告書では，私営学校は26,000校，573,576名の在簿者を擁していたとされているが，公的統計調査はいずれもその実数を過小評価していると推定されている。

私営学校については，P．ガードナーの前掲書参照。

(27) 教育改革家たちは労働者階級内の教師の存在を打ち砕こうとした。教職は日々の生活の他の領域で必要とされる技能から区別された，特殊技能を伴う秘密の領域として神秘化され，専門職化がはかられた。（P. Gardner, *op.cit.*, pp. 107–108.）

な役割を果たしていたことが知られている。[28]

既に述べたように，労働者階級の文化的伝統は，〈教育＝学校〉と〈非教育＝学校以外の生活総体〉とを画然と分離してはおらず，教育＝学習は日々の生活から切り離された異質な時空間での活動ではなかった。その文化的伝統に依拠する私営学校は労働者階級家族の教育機能の拡大延長線上に存在し，そこでの教育＝学習は家庭的雰囲気の中でなされていた。公営学校のカリキュラムの決定的部分を構成する，労働者階級の〈生活圏〉とは異質な〈道徳化〉に拘束されることなく，基礎的道具的技能習得という目的を中心にして学習活動が展開されていた。形式的規律，規則性・秩序の強制という〈道徳化〉の排除は，家族生活や日々の労働生活に合致していたがゆえに，労働者は私営学校を支持したわけである。

したがって，私営学校が労働者階級の要求にふさわしい教育を提供していたとするならば，労働者階級〈生活圏〉への道徳的攻撃の最前線とミドル・クラスがみなした公営学校に対して労働者が敵意をもち拒否したことの理由は明らかであろう。[29]

私営学校に対する労働者階級の支持とその簇生は，労働者階級家族の暗黙の考え――自らの意志で自らが望む場所・形態・方法で子どもたちを教育することができる――を反映していた。

ただし，私営学校への労働者階級の支持と公営学校に対する敵意・拒否に，政治的階級意識にもとづいた労働者階級の教育意志を読み込むことはいささか困難があろう。私営学校対公営学校の抗争は「大きな意味では，地域社会に融和した前産業社会機関対外部から地域社会へと押しつけられた近代組織の抗争であった。」[30]との評価にみられるように，私営学校は現われ出る教育文化形

(28) 遺言の作成，代書人，ストライキの指導者として活躍した事例がある。(*Ibid.* p. 94.)

(29) ハンフリーズによれば権威主義的，官僚的学校教育への反対は，三つの主要な不満に根づいている。①義務化は家族経済に脅威を与える。②組織的・抑圧的形態は，労働者の親が子どもに与えようとした自由を踏みにじった。③人格陶冶を共同体から，非人格化された官僚的組織へと移そうとした。以上のことは家族の慣習的権利への侵害とみなされた。(S. Humphries, *op. cit.*, p. 88.)

態というよりも，残滓の防御的・継続的教育文化形態であった。そこには，教育活動と政治活動との明確な結びつきはなかったし，発展する近代公教育制度への理論的批判・反対もみられなかった。(31)

労働者階級私営学校と同様に，労働者階級文化に基盤を持つ教育機関として日曜学校が上げられる。(32)

1851年時点で登録者数210万人を擁した日曜学校は，その起源を1780，90年代の福音リヴァイヴァルにまで遡ることができる。この宗教的熱狂はミドル・クラスに限定された現象ではなく，その支持者として日曜学校が教育対象とした労働者をも含んでいた。その当初から日曜学校は労働者階級地域共同体の土着の機関としてみなされていた。登録者数からいってもあるいは学校所在地が都市に限定されていなかったことからも，労働者階級の子どもの誰もが，日曜学校の教育を受けたことを物語っている。1830年後，ほとんどの労働者階級の子どもたちは少なくとも日曜学校で２、３年間過ごした，と推定されている。(33)

日曜学校は財政を労働者が拠出した基金に依拠しており，ときには労働者自身によって運営されていた。ほとんどの教師は労働者階級出身者であり，かつての日曜学校の生徒であった人びとが50％以上を占めていた。教師は生徒と同様の環境の中で学習するという苦闘を続けてきた先達者であり，日曜学校での教育＝学習は相互扶助と励ましをその過程に含むものであった。「日曜学校は労働者階級の宗教と希望――幼い弟妹に習得した技能を伝達したいという年長の生徒の希望――の表現のための媒介物であった」(34)といわれているように，自らが習得した技能を後から続く世代に伝達するという心性的文化の象徴的存在であった。

---

(30) Thomas W. Laqueur, 'Working Class Demand and the Growth of English Elementary Education, 1750–1850', in L. Stone (ed.), *Schooling and Society* (1976), pp. 195–196.

(31) P. Gardner, *op. cit.*, p. 4.

(32) 日曜学校の研究書としては， Thomas W. Laqueur, *Religion and Respectability : Sunday Schools and Working Class Culture 1780—1850* (1976) が重要。

(33) *Ibid.*, p. 45.

(34) *Ibid.*, p. 93.

子どもたちの短期間の学校出席を補足する機関の一つであった日曜学校は，教授活動にほとんどの時間が充てられており，労働者にとって夾雑物であった朝会や管理者による訓戒が少なかった。年齢ではなく到達度水準によるクラス分けがされ，労働者に悪評高いモニトリアル・システムを用いておらず，教師と生徒との結びつきが強かった。それに公営学校のように教会出席，短髪，他の規律を押しつけることがなかった，という点で労働者階級私営学校と軌を一にしていた。

この結果，日曜学校での読み方の到達水準は全日制学校での１～２年間の水準に相当し，日曜学校でのみの書き方の到達水準は全日制学校での４年間に匹敵した，と推定されている。(35) 日曜学校が人びとをひきつけた要因はそれが提供する世俗的教育にこそあったといえよう。

その上，学校教育にかかる費用と潜在的利益という経済的観点から教育を捉えていた親にとって，日曜学校は利点があった。それは無償であり，平日の労働に抵触することがなく，家族収入を減らす心配がなかったからである。

日曜学校は急激な経済的・社会的変化が親から子どもを引き離した時代に成長した教育形態であるといわれる。父親は息子に職業技能を，母親は娘に家事を教えることができた一方，基礎的識字の伝承は可能であったにしても，印刷されたことばという非伝統的技能は伝達が困難であった時代に，そのギャップを埋めるために日曜学校は発生し，ひろまりをみせた。もはや個々の親が家庭で与えることのできない教育を，親たちは毎日曜日に子どもを学校に通わせることで得ようとしていたといえよう。この意味で，日曜学校は19世紀における教育活動の増大する分化の第一段階を示すものであった。(36)

この分化は教育ばかりでなく他の領域にも及んでいた。古い形態の慈善，救貧法そして地域共同体そして家族のインフォーマルなネットワークは，急激に脹れ上がる人口の社会的要請を次第に満たすことができなくなってきたので，日曜学校は教育以外の多様な社会的活動を展開した。これらは生徒や教師の親

(35) *Ibid.*, p. 123.
(36) *Ibid.*, p. 153.

切心から発する個人的な行為から，かなり組織立った病気，埋葬，服装の各クラブの活動にいたるまで広範囲にわたっていた。(37)

Ⅳ　知的上昇と民衆文化

近代的教育形態をとりつつあった学校――その中核としての公営学校――が，労働者階級の教育経験に及ぼした影響の浸透度はどの程度のものであったのだろうか。たとえば，学校教育と識字率との因果関係は，産業構造，地域差などの要因が介在しており，錯綜しているために，必ずしも一様ではないが，19世紀前半において，その関係はきわめて希薄であったことが明らかになっている。(38)労働者階級の教育態様は，フォーマルな学校という教育形態よりも，日常生活の文化基層に流れる教育慣行に支えられていたからである。家族，労働者階級地域共同体内に存在する教育形態――労働者階級私営学校や日曜学校など――で教育を保持することが歴史上可能であったし，実際に労働者階級はそうしていた。

教育＝学習は労働から隔離された生涯のある凝集された時期＝〈子ども時代〉を特徴づける活動ではなかった。それは日常生活のなかに渾然と融和した活動であり，子どもから大人への成長過程の中にこそ存在した活動であった。

また，読み書き能力の獲得にしても，社会階層上昇への要求というような経済的観点からのみ動機づけられたものではなく，民衆を取り巻く世界に書きことばがある程度浸透していたがゆえに，機会と必要性が生じた際に獲得されるものであり，その過程は残りの生涯と有機的に関連したものであった。ラーカーが指摘するように「読み書きを習う特定の動機は，16世紀以降民衆文化を定義づけた意味の構造との関連で見られなければならない。人びとはこれあるいはあれという特殊な理由で読み書きができるようになったのではなく，書きことばのみが可能とするコミュニケーションの力によって，生活のすべての領域で接触されているからそうなった。したがって，読み書きを習う一つの動機があっ

(37)　*Ibid.*, p. 172.

(38)　拙稿「産業革命期イングランドの識字率と労働者階級教育態様」『人文研究』第71輯（1986）ではこの点を指摘しておいた。

た。これらの技能は社会的コンテクストの中でより効果的に役目を果たすことを男女に許す。このことが外部から提供される学校がなくても，なぜ土着的支持状況が民衆の識字の創造と伝達に責任をもっていたかを説明する」[39]ものであった。

19世紀のはじめに労働者男女の間で，識字能力がかなりなひろまりをみせていたことは，突然の現象ではななく，それ以前の世紀に労働貧民の間で読むことのできる層が確実に増えた結果である。実際，労働貧民は書きことばとの接触を一世紀以上も前から既に持っていた。読物，ブロードサイド，チャップブックの存在自体が書きことばを読むという伝統があったことの証である。中世からバラードや昔話という形態で継続してきた口承文化は，17世紀末からその普及のために印刷されたことばに依存する文化の一部となっていた。確かに，労働者階級共同体は，その集合的記憶に内包されている以上の歴史は持っていなかったが，口承文化内でさえも，個人や集団の記憶の忘却から保護するため，書きことばにすることをしており，読みの伝統がいくら希薄なものであろうとも，労働貧民の文化には口承文化と同じく書きことば文化があった。[40]

もちろん，口承文化と書きことば文化との間には，継続の要素ばかりでなく，断絶があった。このことは民衆文化と教育との関係についてもいえよう。

教育はその過程内に当然のことながら知識の獲得を含み，〈知〉をわがものにすることはその主体にとって知的解放へと連なるものである。ひとたび〈知〉の魅力にとりつかれた者にとって，知的上昇は不可避な自然的過程であり，それは新しい地平を彼らの意識の裡に切り拓かせたはずである。彼らは周囲にあふれる活字文化に日常的に晒されることによって，そしてそれを積極的にわがものにすることによって，口承文化が内に含んでいた信念・慣習構造の圏内から苦闘しながら飛び出していった。その過程はいうならば彼らが生まれ育った共同体の信念・慣習構造からの知的乖離であった。その乖離は労働者階級共同

(39) Thomas W. Laqueur, 'The Cultural Origins of Popular Literacy in England 1500–1850', *Oxford Review of Education*, vol. 2, no. 3 (1976), p.255.

(40) David Vincent, 'The Decline of the Tradition in Popular Culture', in Robert D. Storch (ed.), *Popular Culture and Custom in Nineteenth-Century England* (1982)

体の信念・慣習構造を〈知〉の高みから眺望することのできるまなざしを労働者に授けた。いうなれば，類的親和力のきわめて強固な世界から，抽象力の支配する共同世界への飛躍を可能にする力を〈知〉はもたらしたといえよう。

バンフォードは彼を生み育てた共同体の世界で大きな役割を演じた迷信にその自叙伝の一節をあてていた。それはその桎梏からの彼の解放の歩みを跡づけるために，ひいては彼が帰属する階級の進歩を評価する手段としてであった。彼は言う。

「労働者階級の嗜好と習慣にここ2，3年のうちに起きた大きな変化を，われわれは明瞭に認めることができる。明らかになったこれらの変化を見れば，文化（シヴリゼーション）ということばによって意味される精神状態，肉体的習慣が進歩しているか，後退しているかをよりよく決定できるであろう。」(41)

知的上昇を遂げた労働者にとって，彼のまわりの労働者がものごとの因果関係を適切に理解できずに，共同体の信念・慣習構造に代表される知的まどろみの世界に安住している限り，工業化・都市化の進行する世界から彼らは立ち遅れ，折り合う望みを失くしてしまうことは自明の理であった。「大衆が知識をもたず，彼らが常日頃見聞きしていることの原因を知らないのに比例して」「彼らの想像力は放たれ，彼らの理性は弱まり，彼らはあらゆる誤った流言，あるいは一般にひろまりをみせている偏見やまどわしのえじきとなる。」(42)

政治活動に携わっていた人びとにとって，迷信などの〈知〉のまどろみの支配は，労働者階級解放の途上に横たわる障害物を象徴していた。〈知〉のまどろみの源にまで辿って行き，そのからくりを暴かないかぎり，人間が創り出した世界を支配することは不可能であったからである。彼らにとって，迷信の衰退は自由の追求にとってもっとも関連のあるものであり，〈知〉の解放は自由の追求への必須の前提であり，それなくして支配階級のイデオロギーを転倒させることは不可能であった。いいかえれば，労働者が自らの存在を覆っている

(41) Samuel Bamford, *op. cit.*, p. 132, quoted in David Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom*, p. 168.

(42) Joseph Lawson, *Letters to the Young on Progress in Pudsey during the Last Sixty Years* (1887), p. 48, quoted in David Vincent, 'The Decline...', p. 33.

社会・経済・政治のからくりを脱神秘化することができた時に，はじめて彼らは自らの階級意識に立ち支配階級と対峙する力量を身につけることができる，ということである。まさに「知は力なり」であった。労働者インテリゲンチャアの一人は言う，

「あなたが労働者の間に無知を見い出したところでは……彼らは階級（ザ・クラス）（中産階級）へとおもむいていることに気づくであろう。労苦する知的な人びとを見い出したところでは，彼らは仲間の状態を改善する試みへとおもむいている。このことの最も明らかな証拠の一つは，階級（ザ・クラス）が民衆（ピープル）を無知のままにしておこうとしていること，今日でさえも，この恵みをわれわれから奪うことができるならば，そうしようとしていることにみてとれる。」(43)

確かに〈知〉の解放は自由の追求のために必須な道具を提供した。知的に上昇した労働者はそれだけ知的眺望を拡張することができ，個々の地域共同体内では外部世界への窓としてふるまうことができた。地方性を克服し，階級としての普遍性に立たざるをえないどんな種類の活動の背後にも，このような人びとがひかえていた。彼らによって所有されている技能はどのような労働者階級組織にも不可欠であった。あらゆるストライキ，デモ，請願の背後には，おびただしい量の議事録，手紙，ブロードサイド，新聞，したがって書きことばとそれを駆使できる労働者インテリゲンチャアが存在した。それゆえ政治・社会危機が生じた際には，読むことのできる者は指導的地位へと押し上げられた。

だが，このような知的な解放は労働者の内的世界に葛藤を惹き起こした。知的に上昇した労働者がわがものにした知的自由は，彼ら自身を育んだ日常世界から自らを乖離させる危機を裡に孕んでいた。労働者階級の慣習，ことばづかい，思考方法，生活・行動規範が，知的に上昇した労働者のそれと齟齬をきたし始めたのである。

知識の追求は様々な非合理的な行動形態――最も顕著なものは飲酒――から労働者たちを遠ざける傾向をもたらした。彼らは知識の追求にのりだすやいな

(43) James Hawker, 'The Life of a Poacher', MS., published as, Garth Christian, ed. and intro., *A Victorian Poacher. James Hawker's Journal* (1978), p. 91, quoted in David Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom*, p. 175.

や，酒が取り結ぶ人的結合関係から退きつつあった。「私はそのときにパブをけっして訪ねなかった」とヒートンは述懐している。というのは「私が洗練しようとつとめていた詩的アイデアは，酒場（エールハウス）とその仲間への嫌悪を私に与えた」(44)からである。

酒に溺れることは無力な子どもの眼前で家族を崩壊させ，ミドル・クラスによる搾取に対抗する力を大人から奪いとるものであった。飲酒に対する敵意を駆り立てそしてそれに代わる生活様式を希求させた中心にあったのは自制・克己という考えであった。このような考えは，労働者男女は道徳性が欠如しているので，禁酒の誓いによる絶対禁酒が酒びたりへ陥るのを防ぐ唯一の手段である，と考えるミドル・クラスによる禁酒運動とは一線を画していた。(45)

飲酒が非合理的なものだといくら批難されようとも，酒は労働者には欠かせないものであった。パブへ集まってくる人びとは，日常の不安そして労働のきびしさを共有しており，そこは解決する手段をも提供してくれる場所であった。とりわけ酒を共に酌み交すことによって得られる人と人との結びつきは大きな重要性をもっていた。友愛協会などの相互扶助組織が定期的会合をパブで開き，それに伴う飲酒と喧噪が支配者によっていかに批難の対象とされようとも，それらは彼らの人間的結びつきを強めるための不可欠の附属物であった。(46)

それゆえ，知的な上昇は個々の労働者には，彼らを育んだ〈生活圏〉からの疎隔，そしてそれに伴う孤独をもたらす一方，迷信や飲酒というような非理性的信念・行動の影響から自分自身そして帰属する階級を解放しようとする試みは，知の高みに立つことのない大衆の生活様式の自律性を支えた活力源を枯渇

(44) William Heaton, *The Old Soldier ; The Wandering Lover ; and other poems ; together with A Sketch of the Author's Life* (1857), p. xviii, quoted in David Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom*, p. 183.

(45) 「私は酒を飲むことを否定するつもりはない。…私は禁酒を唱道する男女に敬服するが，彼らの方法に常に賛同するものではない。あなたがたは力によって人に節酒させることはできない。そうすべきではない。われわれが禁酒すべき権利と同様，人は酒を飲む権利を持っている。これが自由な国である。われわれが享受しているのと同じ自由をあらゆる人びとに与えるべきである。」(James Hawker, *op. cit.*, pp. 24–25, quoted in David Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom*, p. 171.)

(46) パブについてはP. Bailey, *Leisure and Class in Victorian England* (1978) 参照。

させていった。知識を追い求めることは労働者が継承してきた文化に楔を打ち込み，分裂・弱体化させる効果を持っていたといえよう。

このような〈知〉の解放が孕んでいた，労働者階級文化に対する分裂的・破壊的影響にもかかわらず，知的上昇を遂げた労働者は職業上でも思考においても労働者階級内の存在であった。労働者組合組織は誕生して間もないし，労働者階級議会政党はまだ存在していなかったので，恒常的に仕事を得る分野が拓けていなかった。彼らが辿った道は自身の階級にとどまり，教職やジャーナリストのような社会的両義的地位を占めることであった。これらの人びとはミドル・クラスの急進主義者によって要求された思考と行動とは軌を一にしない方法で考え行動する，たいへん限定的自由を獲得した一種の労働者インテリゲンチャアの一群を形成した。

V　急進主義　19世紀末労働者階級文化

労働者階級の教育態様が〈教育＝学校〉と〈非教育＝学校以外の生活総体〉とに画然と区別されずに，融和状態にあり，子どもたちは親，兄弟，縁者そして友人によって，あるいは労働者階級私営学校，日曜学校によって，生活領域に浸透した形態で教育活動がなされ，また，そのような教育態様が労働者階級文化の所産であったとすれば，それを歴史上にどのように位置づけるかが問題となる。

労働者階級が保持していた教育態様は，生活の生産・再生産が一定程度の〈自律性〉を持ち得ていたがゆえに存在したものであった。すなわち，資本の浸透が家庭・仕事場・地域社会の隅々にまで到達していなかったがゆえに，〈自律性〉，その上に依拠する教育態様を保持し得たのである。

しかし，その労働者階級教育態様が依拠していた〈自律性〉は，生産面における労働の資本への従属強化を通して次第に浸食され，分断されてゆく歴史的運命にあった。この意味で労働者階級の重層的教育網状組織はきわめて脆弱な基盤の上に形成されていたものであるといえよう。さらに，再生産面への学校教育による国家の直接介入という攻撃に晒され，家庭・仕事場・地域社会の基

盤の上に教育を築き上げることは一層困難になっていった。と同時に，交通そして社会的分業の歴史上かつてないほどの規模における全面的展開によって創出された社会においては，生産力水準に見合った教育を把握し，さらに発展させる必要が生じてきた。

このような歴史的情況の中で，労働者階級運動として評価される急進主義は，国家，教会に後押しされた学校に代わる教育形態を自らの手で設けようとしていた。(48) その教育形態はインフォーマルであるということを特徴としている。急進主義教育は目的意識的に構造化された学校や機関などで展開される教育活動ではなく，「その典型的形態は即興的，偶然的したがって短命なものであり，個人や集団のより直接の必要性を超える恒久的実体をもたない」(49) ものであった。この時期に〈教育＝学校〉と〈非教育＝学校以外の生活総体〉との分離は進行しつつあったが，急進主義者たちはこの流れのなかにはいなかった。その一人ホーリオークは述べている。「ものを見たり考えたりする人びとにとって，知識は手の届くあらゆる場所にある。」(50) 急進主義教育は日々の生活に根づき，民衆の統制下にある伝統的教育領域――家族，近隣，仕事場，父母からの読み書き能力の伝授，博識の友人・隣人との交流・語らい，仕事場での討論，徒弟制度，労働者階級私営学校，日曜学校など――に依拠し，それを発展させ，豊饒化させた。

資本の直接的関与・強制を比較的免れている伝統的教育領域を基盤としながら，その領域は既に述べたように安定したものではなくたいへん脆弱であったが，急進主義者は彼ら自身の文化革新を進展させたといえる。様々な種類の相互読書・討論グループ，パブやコーヒーハウスの新聞閲覧室，チャーティストやオーエナイトの支部の文化政治学，急進主義出版物はその好例である。

(47) David Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom* pp. 149–154. Richard Johnson, '"Really Useful Knowledge".....', p. 93.

(48) 急進主義教育についての以下の叙述は Richard Johnson, '"Really Useful Knowledge"...' に負っている。

(49) *Ibid.*, p. 79.

(50) G. J. Holyoake, *Sixty Years of an Agitator's Life* (1892), vol. 1, p. 4. quoted in Richard Johnson, '"Really Useful Knowledge"...', p. 79.

結局のところ，急進主義教育は生活の生産・再生産に対する資本の統制が緩やかであったならば存在したであろう教育領域に頼った。したがって「急進主義教育は再生産に対する残存する自律性や統制領域を拡大させ発展させる試みと理解できよう。もしこのことが正しいならば，十全に『労働者階級』現象ではなかったと言うことが重要である。それは十全なプロレタリアの存在状態に依拠していなかった」(51)からである。

それゆえ，急進主義教育を保持することは社会構造上からいっても世紀中葉から困難をきわめてくる。それにつれ労働者階級の教育戦略も変化した。1860年代の末から，労働者階級の教育戦略は自らの手で代替教育形態を築き上げることから，国家が提供する学校教育へのより平等な権利を要求することにとって代えられた。かくして急進主義者，チャーティストそしてオーエナイトは改革された国家の仕事として以外は「国家教育」に反対したが，後の社会主義者は国家によって統轄された学校教育の発展を推進する一翼を担っていた。この結果，子どもと大人との明確な区別，教育と学校との同一視，教育内容の非政治化そして教職の専門職化が受け入れられていった。(52)

そうであるとしても，本当にブルジョアジーによる階級支配の試みが労働者階級の〈生活圏〉の核にまで浸透し，労働者の心性の変容・変態をもたらしたのだろうか。その変容・変態はジョーンズによればきわめてパラドキシカルな性格のものであった。20世紀初頭までにロンドンで出現した新しい労働者階級文化は「ミドル・クラスの文化とは明らかに区別されており，その性格と方向を指図するミドル・クラスの試みを通さないままであった。その支配的文化機関は学校，夜間学級，友愛協会，教会ではなく，パブ，スポーツ新聞，競馬場，そしてミュージック・ホールであった。」(53)この文化は性格として防衛的そして保守的なものであり，その文化内での焦点は「労働組合，友愛協会，協同努

(51) Richard Johnson, '"Really Useful Knowledge"...', p. 101.
(52) *Ibid.*, pp. 100–101.
(53) Gareth Stedman Jones, 'Working-Class Culture and Working Class Politics in London, 1870–1900 : Notes on the Remaking of a Working Class', *Journal of Social History*, 7 (1974), p. 479.

力，禁酒プロパガンダや政治（社会主義を含む)」ではなく「楽しみ，娯楽，ホスピタリティ，スポーツ」[54]にあてられていた。いわば対抗文化であるよりは「慰め」の文化の色彩が濃厚であった。

この変容の要因についてジョーンズは次のことをあげている。19世紀前半に支配的であった職場中心の伝統的職人文化の崩壊に伴い，そこに育まれた政治的闘争性は失われ，労働者階級文化は防衛的保守主義へと転化していった。1870年法によって提供された初等教育もこの過程に一役買っていた。「(前世紀の）労働者クラブの急進主義者は，メンバーがなぜクラブ生活の政治・教育面に関心をあまり持たなくなったかの理由を考えたとき，彼らはその理由を初等教育に帰した。」[55]

ただし，労働者階級文化の防衛的保守主義化にもかかわらず，ブルジョア的文化は労働者階級の心性の奥深くまでは浸透していなかったというジョーンズの指摘は，一般に「ヘゲモニー」「ブルジョア化」概念で19世紀末の階級文化の変態が説明されている点から大きく隔たっている。実際に，ロンドンでは労働者階級は熱心な定期的教会出席者ではなかった。というのは，教会は慈善と結びついており，教会出席は情けない貧困を意味し，セルフ・リスペクトの喪失を意味していたからである。労働者階級の間では，奨励された倹約も実利計算にもとづく貯蓄形態よりも，セルフ・リスペクトを他人に示すことへの関心の方がより重要性を持っていた。たとえば，金銭に余裕があると実用品よりも装飾品を買うという行動にみられるように，労働者にとって体裁をつくろい，リスペクタビリティを示すこの努力は教会出席，禁酒，貯金の所有を意味していなかった。[56]

新しい労働者階級文化はミュージック・ホールに象徴されるとジョーンズは指摘する。第一次世界大戦以前のミュージック・ホールで労働者が愛唱したユーモラスな歌は，福音主義などの支配的文化を拒否する一方，日々の生活の

(54) Charles Booth, *Life and Labour of the People in London*, Religious Influences Series 3 (1902), vol. 7, p. 425, quoted in Gareth Stedman Jones, *op. cit.*, p. 479.
(55) Gareth Stedman Jones, *op. cit.*, p. 489.
(56) *Ibid.*, pp. 471–479.

苦しみ，そして階級的怒りに対する解毒剤を提供し，困窮への順応を表現したものであり，本質的に保守的な役割を演じた，と彼は結論づけている。ミュージック・ホールによって提供された無害な娯楽と「コミック・リアリズム」に内在する自らの被支配的地位を宿命と捉えるユーモアは，「1870年代から1900年代までのロンドンの労働者階級生活の大きな傾向の反映そして補強であった」(57)からである。

ジョーンズの解釈のアイロニー――ミドル・クラスの試みが失敗したにもかかわらず，市民社会の支配的イデオロギーを鋭く拒否する労働者の心性を突き崩し，労働者は自らの被支配的地位を新たに宿命として甘受することになった――はイングランド労働者階級の若者に対する学校教育についての現代の研究のアイロニーに近く，類似したものとなっている。ウィリスの観察――現代の学校や他の労働者機関での価値伝達の過程――は同様のメカニズムが働いていることを示唆している。彼によれば，労働者階級の少年たちは学校の抑圧や異質な文化に反抗するが，しかし彼らの反抗は労働者階級の被支配的地位の継続性を保障し，それを正当化するのに寄与してしまうという傾向があり，このアカデミックな失敗が彼らの経済的失敗の理由となっている。(58)

19世紀末の労働者階級文化は確かに世紀前半のそれとは様相を異にしていた。だが，それは「社会統制」の結果や「ブルジョア化」によるものというよりは，新しい時代相の中で再形成されたものであることは確かである。そうで

---

(57) *Ibid.*, p. 490. ジョーンズの研究についてハンフリーズは次のような批判を加えている。労働者階級文化を経済構造とその発展の中に位置づけた後，分析道具として文化剝奪理論から抽出した概念を適用しており，若干のコンテクスト内で，支配的文化への攻撃的そして不遜な挑戦を表出できる，労働者階級ユーモアのうちに含まれている強力な反抗要素を見逃している。このユーモアの豊饒さの伝統から労働者階級の若者たちは多くのものを抽き出し，支配的機関が獲得しようと躍起となっていた子どもや若者の服従のたがを緩めることに積極的に利用した。学校や仕事場などでパロディの歌を唱うこと，冗談の言い合い，ずる休みのような諸活動がその好例であり，それらは若干の場合には階級意識の原初的形態とみなすこともできる。(Stephen Humphries, *op. cit.*, pp. 26–27.

(58) Paul Willis, *Learning to Labour : How Working Class Kids get Working Class Jobs* (1977), 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』(筑摩書房 1985)

あるならば，階級文化内での教育についてもこの視点から論じ直されなければならないであろう。